

秋建時報

<http://www.a-kenkyo.or.jp>

秋建時報

平成26年9月1日(第1244号)



発行／(社) 秋田県建設業協会

秋田市山王四丁目3番10号

TEL 018(823)5495

FAX 018(865)2306

協会・技士会

秋田県発注工事施工の33社に栄誉

秋田県優良工事表彰祝賀会



秋田県建設業協会(村岡淑郎会長)と秋田県土木施工管理技士会(北林一成会長)は8月29日、同日行われた秋田県優良工事表彰式における受賞企業及び技術者を招いて秋田キャッスルホテルにおいて受賞祝賀会を催した。

今年度の優良工事表彰においては、30件の工事を施工の33社が受賞。祝賀会においては、受賞した技士会会員の技術者に表彰状及び記念品、企業に対して表彰盾を贈呈した。

また、祝賀会においては、秋田県から佐竹敬久知事を始め多数の来賓が来場し、受賞者に対して祝辞が送られた。

今年度の受賞会員企業は次のとおり。

(株)柳沢建設	(鹿角市)
(有)和田興業	(小坂町)
花岡土建(株)	(大館市)
平和建設(株)	(大館市)
(株)伊藤羽州建設	(大館市)
秋田土建(株)	(北秋田市)
(株)佐藤庫組	(北秋田市)
大森建設(株)	(能代市)
西村土建(株)	(能代市)
中田建設(株)	(秋田市)
旭建設(株)	(秋田市)
(株)清水組	(男鹿市)
(株)沢木組	(男鹿市)
(株)板橋組	(男鹿市)
秋田瀝青建設(株)	(潟上市)
(株)村山組	(潟上市)
(株)大雄建設	(潟上市)
マルト建設(株)	(潟上市)
山勇建設工業(株)	(由利本荘市)
(株)沢野建設	(大仙市)
(株)宮原組	(大仙市)
日高建設(株)	(仙北市)
佐藤建設(株)	(仙北市)
(株)畠山建設工業	(仙北市)
(有)協栄建設	(仙北市)
(株)最上田組	(横手市)
(有)泉谷土木	(横手市)
(株)高嶋組	(湯沢市)

建設系高校生の就業支援

小型車両系建設機械（整地等）特別教育

秋田県建設業協会は7月中旬から建設系高校生への就業支援などを目的とした小型車両系建設機械（整地・運搬・積込み及び掘削用）の特別教育を昨年度に引き続き実施した。

教育は建災防秋田県支部が協会から委託を受けて実施し、県内の高校9校から土木・建築等学科の生徒延べ170名が受講した。

教育は2日間のカリキュラムで、1日目は各地域において学科教育、2日目は建災防教育講習所（秋田市上北手御所野地内）に場所を移して実技教育を実施。

実技教育では、ホイールローダーと油圧ショベルの2機種に受講生が交代で搭乗して、講師の指導のもと、走行・掘削等の実習を行った。参加した生徒は、慣れない重機の操作に苦労しながらも安全に作業を進め、全員が無事に2日間の教育を受講、8月12日を最後に全7回の教育を終了した。

【実施日程・参加校】

- 7月22日・23日 横手清陵学院高等学校
(学科会場:横手清陵学院高等学校)
- 7月24日・25日 秋田工業高等学校
(学科会場:秋田県建設業会館別館)
- 7月28日・29日 能代工業高等学校
(学科会場:能代工業団地交流会館)
- 7月30日・31日 大曲工業高等学校
(学科会場:大曲工業高等学校)
- 8月 5日・ 6日 大館工業高等学校、秋田北鷹高等学校
(学科会場:大館労働福祉会館)
- 8月 8日・ 9日 由利工業高等学校、西目高等学校
(学科会場:由利建設業会館)
- 8月11日・12日 金足農業高等学校
(学科会場:秋田県建設業会館別館)



秋田・鉄路の情景

Vol.
22

「SLあきた路号」

C61 20号機



文と写真／加藤隆悦

フリーカメラマン兼フリーライター
取材・執筆歴／旅の手帖、WoodyLife、
ベンチャー・リンク、郷、あるる他
海外取材歴／ドイツ、アメリカ、ブラジル
写真塾・写楽 主宰／写真教室、撮影ツアー
企画等

今年も秋田の鉄路にSLが還ってくる。

昨今は鉄道がブームで、全国各地でSL列車の運転が人気を呼んでいるが、秋田県内で3年連続してSLが走るのは非常に珍しく、大変貴重なことと言える。

一昨年の秋田～東能代間、昨年の秋田～横手間の運転に続いて、今年は10月18・19日の二日にわたって秋田～東能代間で運転される。

言うまでもないことだが、電気機関車やディーゼル機関車と違って蒸気機関車は、車両の前と後ろがはっきりしている鉄道車両なので、終点まで走って折り返す時は車体の向きを変えなければならない。SL全盛時代には、向きを変えるための設備「転車台」が主要駅には備わっていたが、時代のすう勢で撤去されたところが多く、結果として、SLの復活運転をするにしても、転車台の残っている駅間に限定されてしまう。それで、秋田県内では、秋田、東能代、横手のいずれかの駅を結ぶ区間での運転ということになる。

秋田駅周辺では、かつては駅裏の秋田機関区や、秋田操車場（現秋田貨物駅）にも転車台はあったが、現在は秋田市檜山の車両基地にあるのみで、東能代や横手から戻ってきたSLはここで向きを変えて翌日の運転に備える。

SLといえばD51（デゴイチ）が鉄道ファンでなくてもよく知られており、かつてのSLイベント列車の運転はもっぱらD51 485号機が担っていたが、なにぶん古い車体を酷使して走らせているので故障が発生すると修繕に時間がかかり、もう一両走らせられるSLが必要ということから、群馬県伊勢崎市の公園で30年以上に渡って静態保存されていたC6120号機に白羽の矢が立って、2011年に復活を果たしたものだ。

動輪が4軸あるD51は、本来は、速度よりも馬力重視の貨物列車を牽引する目的で設計されている。一方動輪が3軸のC61は、馬力よりも高速性重視の旅客列車仕様の設計だ。その意味でも客車を牽く姿はやはり様になっている。

二日間の本運転に先立って、直前の5日間ほど、同じ区間、同じダイヤで試運転が繰り返される。10月の第三週は、古き良きSL列車の情緒を思い切り堪能したいものだ。

一匹のカエル

人間は社会の部分品であってはならない

菅 禮子

「えーここに一つの小さな水たまりがあったとします。まあそれが池でも、沼でもいいのですが……」と言う言葉ではじまったK.T.先生の第一声——その時教室の壁をゆるがせてひびき渡ったのは、箸がころげてもおかしい年頃の乙女たち百数十名の大笑でした。

先生のお声は、あまりにキイの高いボーイソプラノだったので。それだけではありません。広い額の下の大きくまるい二つの瞳は見事なロンパリ即ち同時に左と右を見ているのでした。ひょろりと細長い華奢な首の上にのったその顔と声は、まさに今、宇宙から地球上に降り立った火星人といった感じそのもの——。一方の片隅で笑いが納まると、また別の片隅の一角に水たまりがドゥッッと吹き出すといった具合で、笑い声はなかなか鎮まりません。わたしは少し心配になって来ました。その日新任の教授どのの初講義ということで、二クラス合同で集まった学生達は、期待に胸をときめかせていたのですが、もうその期待も、教授の肩書も吹き飛ばして笑いのめす乙女たちの傍若無人ぶりに先生は、きっと怒ったかも……それとも恥ずかしさに打ちのめされて立ち往生しているのでは……？ 現に先生は第一声を発したまま、講義をつづけられないでいました。うつむいて、なるべくそのお顔を見ないようにしていたわたしは(だってわたしだって吹き出さずにはいられなかったのですから)おそろおそろ顔を上げて、その人の方を見やりました。すると、その哄笑の渦の中であって、先生は少しも動ぜずに、ご自分もさもおかしそうに笑っておられたのです。わたしは思わず目を睨りました。胸が高鳴りました。それはとても次元の高い、これまで一度も出会ったことのないすばらしく高貴な値打ちものが、わたしの胸中に流れこんだ瞬間でした。ようやく笑いの鎮まった教室でつけられた生物学の初講義の一言一句は、その衝撃的な出会いのせいか、今でも全文暗唱できるほどわたしの胸の中に刻みつけられています。

「その水たまり即ち池にある日一匹のカエルがやって来ました。カエルがそこに棲みつくには、池の深さ、広さ、水温、水質、まわりの草や樹、虫や魚や鳥などの生物、それらの環境が、カエルの生活の条件にあわなければなりません。カエルは棲みつきました。

これを生物学では“適応”と言います。やがて次の年、別のカエルがやって来て、池にはカエルが十匹になり、毎年カエルは増えていって、とうとう百匹になりました。春になると毎晩カエルの大合唱があたりをゆるがせたのです。ある年、カラスの大群がやって来てカエルは六〇匹に減りました。またしばらくたってある年、疫病がはやり、カエルは三〇匹になりました。そしてまたしばらくたってある年、百年に一度の日照りのため、池はカラカラに干上がってしまいました。ひからびて死んだもの、他の水たまりを目指して、あてのない旅に出たもの、さまざまの中で、そこにはとうとう一匹のカエルもいなくなりました。これを生物学では“自然淘汰”といいます」

それから終戦までの数ヶ月、朝鮮半島の首都京城(ソウル)は清涼里の赤煉瓦の校舎で、日本の敗色濃い苛烈な戦局、生命の瀬戸際の刻々を、あの時ほど寸暇を惜しんで勉強に打ち込んだ日々

は、これまでのわたしの生涯に二度とありません。

防空壕を掘り、食糧増産のための農場作業、軍用機のエンジンの絶縁体に使う雲母原石の加工作業、もうほとんど学課の時間は削られて、中間テストも期末テストもないといった状態でしたが、それでいて点取りでない、真の学問の世界に目を開かせられた希望と欲びにみちた日々でした。飢しさも、激しい作業疲れも、敵機襲来の恐怖も、一つの目的を得て燃え上がった向学心の前には問題ではなかったのす。それはみなK先生の優しく、熱意にみちた教えのお蔭でした。先生の斜視(ロンパリ)は長年の間、左眼で顕微鏡をのぞき、右の眼でスケッチしたためだということがわかり、学生達はみな畏敬の眼で先生を仰ぐようになりました。それは昭和20年、終戦間際の夏のこと、沖縄に米軍が上陸、本土は空襲で焼かれ、この次の米軍上陸は朝鮮半島かと噂されていた頃、いつもざわざわしていた生物教室は、わたしのほか誰もいませんでした。先生はたった一人の生徒を相手に講義され、さしむかいにわたしはそれをノートしていました。そこは三階建ての赤煉瓦の校舎の二階の一番端の生物教室でした。窓の外は真っ青な空に積乱雲が湧き立ち、先刻、敵機の攻撃を避けて、どこかに避退したと思われる味方の軍用機が翼を連ねて轟々と帰って来るところでした。少しの間、言葉をとぎらせ、茫とした瞳で窓の外をみやっていた先生はやがて語を継ぎました。「もし、敵が半島に上陸して来たら元重機銃部隊にいた僕は真先に半島防衛のために召集されるでしょう。その刻はいさぎよく戦って死にますよ。しかし……」ちょっと声をのまれ、やがてきっぱりとした口調で言われました。「しかし貴女たちはどんなことがあっても生きて下さい。生きてそしてなんでもよいから次の代に伝えて下さい。僕と共に学習した草花や虫の生きる姿、いつか星についてお話した宇宙の神秘や、仏像に伝えられた美の伝統、学のひろやかさ～なんでもよいから次代に伝えて下さい」 国の為に戦って死ぬ！と教えこまれた私たち……その中であって「生きよ！」と説かれたその言葉はあまりに鮮烈であり、かつ奇異でさえありました。「自分は戦って死ぬが、君たちは生き残れ！」とはなんとという科学者としての勇氣と英知、真実と愛に溢れた言葉だったことでしょう。戦後、「これまでのことはみなウソだった」と永久の大義を、玉砕を説いた口を拭ってぬけぬけという大人たちの中で、わたしが人間不信に陥らずにすんだのは、あの刻の先生の「生きよ」というひと言のお蔭だったのです。

——終わりに、先生(菊池立身)の著書『現代科学の生命像』のはしがきの一部を紹介させていただく。「原子力の火でスイッチをひねれば電灯はつくし、胃の調子が悪ければ、医者や薬屋にいけばすむと思っている。(略)科学は利用すればよい、われわれは部分品となっていくていばよい。それ以上のことは専門家の仕事だと、ともすれば考えがちである。しかし人間は社会の部分品であってはならないのである。人間はいつも人類の過去、現在、未来について真剣に考える姿勢を失わずに、日常生活に打ちこむべきではないだろうか。人間が自分の社会の建設のために真剣に考えるような社会では、すべての人が考えるための多角的な学習を、また総合的にものを見、自分専門の考え方を確立するためにいろいろな学習をするべきではないだろうか」

(菊池立身著『現代科学の生命像—生命・人間・進化—』1969 法律文化社)